



海の森水上競技場
(令和1年5月撮影)
写真提供：東京都



有明アリーナ
(令和1年11月撮影)
写真提供：東京都

東京アクアティクスセンター
(令和1年11月撮影)
写真提供：東京都

特集

2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた 港湾の取り組み

オリンピック・パラリンピックイヤー 2020年を迎え、全国で大会開催に向けた関連行事などが盛り上がりを見せています。国立競技場等の施設も完成し、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会への注目や期待がますます高まる中、様々な準備や対策が急ピッチで進められています。

本特集では、東京湾の湾岸地区を中心とした競技会場の整備、大会関係者・観客等の受入準備、保安強化に係る取り組み等についてご紹介します。

座談会 水辺のスポーツに期待したい 東京オリンピック・パラリンピック



NPO法人日本ビーチ文化振興協会
チーフプロジェクトオフィサー／
元ビーチバレーボール日本代表

朝日健太郎 [司会]



スポーツコメンテーター／
元競泳日本代表

岩崎恭子





国立競技場をバックに

オリンピック・パラリンピックは戦う場だけではない、世界中のいろんな人が入り交じる場

●朝日(司会) 今日は、情報誌「港湾」の新春号ということで、オリンピック・パラリンピック・イヤーということもあって、特集の座談会を開くことになりました。

特に海辺に関わりの深い皆さんに、オリパラに向けたお話を聞かせていただければと思いますのでよろしくお願いします。まずは富澤さんから、来年の本大会への出場が唯一内定していることもあるので、セーリングの魅力やセーリングというのは海をどう表現しているかをお伺いします。

●富澤 セーリングの魅力というのはやはり、動力なしで風の力だけで走れる、しかもスピード感も陸上で走る3倍といわれるようなスピードで、昔から風の中で走るス



風のみで走るセーリング(プリンセスソフィア杯)

ピード感が魅力でしたね。僕が乗っているRS:X級は時速50キロくらい出ます。

オリンピック競技外ですが、スピードに特化したウィンドサーフィンの一種目では、ちょっと前に110キロを更新したようです。

●朝日 そのスピードで、ヘルメットはかぶらないのですか。

●富澤 80キロ超えたらヘルメットをしないと危ないですね。

●宇田 海でも危ないんですか?

●富澤 80キロ超えて転ぶと海の上で2バウンドくらいすると聞いています。

●朝日 スピード感があるということですね。一度、体験してみたいです。次に、岩崎さんにお聞きしますが、オリンピックは、どういう場所なののでしょうか。ご自身もメダルを獲得されていますし。この話はもう今まで何十万回もされてきたと思いますけれども。



セーリングRS:X級
東京オリンピック日本代表内定
富澤慎



パラトライアスロン
PTS4世界ランク4位
宇田秀生

●**岩崎** 一言で言うと、戦う場所ですね。ただ一方で、2度のオリンピック出場を通して、オリンピックがただの国際大会ではないということを強く感じました。選手村には、生活に余裕のない国の選手など、様々な選手がいます。それぞれの国の事情などを聞くと、複雑な気持ちになることもありました。

また、オリンピックの競泳種目は、1カ国2名出場できます。そのため、50mをなんとか泳ぎ切るような選手た



NPO法人日本ビーチ文化振興協会
チーフプロジェクトオフィサー／
元ビーチバレーボール日本代表

朝日 健太郎 Kentaro Asahi

1975年熊本県熊本市生まれ。小学生175cmあった身長を活かし中学校からバレーボールを始める。春高バレー（鎮西高校熊本県）準優勝。法政大学時代は全日本大学選手権で優勝。1998年サントリー（株）入社、Vリーグ新人賞受賞。2002年ビーチバレーボールに転向。2008年北京オリンピック9位。2010年アジア競技大会（中国広州）銅メダル。2012年ロンドンオリンピック19位、同年現役引退。2013年NPO法人日本ビーチ文化振興協会理事長就任、全国で海辺活用による地域活性化事業を展開し、啓発活動を行う。2016年参議院議員初当選。2019年より現職。

ちも参加しているんです。

●**朝日** 大陸杯といわれる杯ですね。水泳が盛んではない国や地域からも、出場ができる杯が認められています。

●**岩崎** そうですね。そのため、なんとか泳ぎ切ることができる50mか100mの自由形にしか出場できず、やっとの思いで泳ぎ切るんです。そのようなレースを見たときに、何故オリンピックが「平和の祭典」と言われるのか分かった気がしましたね。

●**宇田** タイムどころじゃない。

●**朝日** 自分の中の人生観や価値観の壁が取り払われますよね。それは強烈な経験でしたね。世界中のいろいろな人が入り交じる。東京オリンピック・パラリンピック競技大会には、遠くから、ほんとに日本の名前しか聞いたことのないような人たちがきっと来るでしょうね。この新しい国立競技場を入場行進すると、「日本という国はこうなんだ!」というのを、逆のインパクトとして与えられるかもしれないですね。これは大事な視点だと思います。

今、インターネットでいろいろな情報が得られますが、でも世界規模でみると実際には、そこにアクセスできていない人が相当多いと思います。オリンピック・パラリンピックで日本に来る人の中には、まったく日本をイメージできていない人もいます。そういった意味でも海外から来られる方にインパクトを与える大会になることを期待します。

トライアスロンは健常者も障害者も共にできるスポーツ

●**朝日** 宇田さんは初出場を目指しているということですが、パラリンピックに向けてどうでしょうか。どういう気持ちでチャレンジされていますか。

●**宇田** 僕は、あまりまじめなアスリートではないので、とりあえず目立ってやろうという想いが強いんですね。僕が怪我したときに、家族はもちろんですけど、周りの友人がすごく支えてくれたんです。その人たちもすぐく応援してくれているし、何とかかっこいいところを見せたい。結果はともかく、目立ちたいです。

●**朝日** なるほど。パラリンピックは22競技ありますが、トライアスロンという競技は、オリンピックと同じ設備でできるんですよね。介助者が必要なレベルはありますけれども、基本はルールも全く同じですよ。

●**宇田** はい、僕のクラスは全く同じです。

●**朝日** そこはユニファイドスポーツといって、健常者も障害がある方も一緒にできるスポーツという意味では、すごくこれからの時代にマッチしていると思います。今後ルールが変わり、一緒にのレースに参加して宇田さんも勝つチャンスがありますね。

●**宇田** その辺までいきたいなと思います。がんばり甲

斐があります。

●朝日 パラアスリートの仲間で、トライアスロンに限らず、皆さん、それぞれ個人の想いや目標があると思います。たとえば宇田さんは目立ちたいと仰っているわけですが。

●宇田 目立ちたい、楽しみたいというのがあります。

●朝日 一方で、ストイックに競技性を追求されているパラアスリートもいらっしゃると思いますが。

●宇田 もちろんたくさんいますし、すごく尊敬しています。僕も楽しむっていうスタンスですけど、基本的にはすごく負けず嫌いなんです。僕は小学校から大学までサッカーをしていて、泳ぐのが苦手でした。トライアスロンはスイム・バイク・ランの順番なので、絶対毎回追い上げになるんです。スイムで遅れてバイク・ランで勝負するという。

●岩崎 トライアスロンではスイムの比率が低いので、バイク・ランが強くないと勝てないですね。スイマーはトライアスロンでは厳しいと思います。筋肉のつき方など、身体の作りも違う。

●宇田 バランスのとれた選手が強いかもしいですね。

●朝日 トライアスロンの魅力というか、ご自身の好きなポイントというのはなんでしょうか。

●宇田 やはりちゃんと準備してきている選手が結果を出しています。海に対応するという訳じゃないですけども、当然ですがやっぱりプールと海は全然違う。僕はプールで泳ぐと結構いい感じなのですが、海に出るとあまりいいタイムが出ない。

●岩崎 波や距離感など、多くの違いがありますよね。

スポーツの振興は認知度とスポンサー、競技性ではないところからのアプローチも

●朝日 泳ぎと言えば、富澤さんはいかがですか？

●富澤 僕は、12年競泳、4年水球をやっていました。トライアスロンも挑戦中です。レースには出ませんが、トライアスロンのようなトレーニングは日常的なものとして、スイムがウィンドサーフィンで、その他はランニングとバイク。

●朝日 それは、すごい！さすがトップアスリートですね。大会まで1年を切りオリンピックに向けて目標とかありますか。でも、正直なところ冷静ではないですか？4回目ですから。

●富澤 冷静ですね。出場することに対しては。なので、3大会出場していて、入賞できていないというのがすごく悔しくて、東京五輪では絶対に入賞したい。リオ五輪の後からトレーニングを積んできて、今、6～8位の實力にはなっている。やっぱり入賞は絶対にした

いというのと、メダルまでは少し距離があるんですけども、まだ時間があるので力をつけていきたいなと思います。

●朝日 まだ世界との差があるわけですね。では、どういったところを強化していますか。

●富澤 やっぱり一番大きいのが、水泳やトライアスロンは、タイムはある程度出るじゃないですか。でも、セーリングというのはタイムが絶対ではないんですよ。100%自然相手なので。たとえば100mを20秒で走ったとしても



スポーツコメンテーター／
元競泳日本代表

岩崎恭子 Kyoko Iwasaki

1978年静岡県沼津市生まれ。姉の影響で水泳を始める。1992年中学2年でバルセロナオリンピックに出場、平泳ぎ200mのオリンピック記録（当時）を塗り替え、競泳史上最年少メダリストに輝く。400mメドレーリレーでも7位入賞。1996年アトランタオリンピック10位（平泳ぎ200m）。1998年現役引退。児童の指導法を学ぶために米国へ留学し、水泳・着衣泳のレッスンやイベント出演を通して水泳の楽しさを伝える活動を行っている。



セーリングRS:X級
東京オリンピック日本代表内定
富澤慎 Makoto Tomizawa

1984年新潟県柏崎市生まれ。父の影響で小学2年頃からセーリングを始める。水泳と水球にも取り組んでいたが、高校2年からセーリングに専念。2008年北京オリンピック10位。2012年ロンドンオリンピック28位。2013年RS:X世界選手権11位。2016年リオデジャネイロオリンピック15位。2019年RS:X世界選手権10位。トヨタ自動車東日本所属。



コンディションが違えば全然違うので。どう比較するかというと対相手で相対的に。

●**宇田** 勝つか負けるか。

●**富澤** そう。ですので、ちゃんと強いメンバーでチームを組んで練習していくということがすごく大事です。でも、日本はそこが欠けていますね。

●**岩崎** やはり競技人口はまだまだ少ないですか？

●**富澤** そうなんです。だから、僕の活動は海外メインで、いろんな国のひとりぼっちの選手を集めて、一緒に努力しようというスタイル。海とビーチさえあればできるスポーツですが、今欠けているとしたら認知度が低いことです。

●**朝日** 認知度、やはりそこですよ。今、スタンドアップパドルのボードを活用するサップヨガなど、レジャーやライフスタイルから認知がすごく高まってきているので、競技からではなく、楽しさから関心をもってもらうことが大切で、一方でマリンスポーツはハードルが高いと思われるがちのような気がします。

●**宇田** 僕も、とっつきにくいというか。全部揃ってないと手が出せないという感じがします。

●**朝日** でもトライアスロンはそうでもないですよ、砂浜から直接入っていきますよね。一方、オリンピックは入水の形が飛び込み形式になることが多いですね、国際レースは両方ありますか？

●**宇田** あります。パラトライアスロンは逆にないです。フローティングスタートといって、ぶかぶか浮いた状態からスタート。

●**朝日** 足に障害がある方もいるからということですね。我々としてはいろんな整備が必要なんじゃないかと勝手に思っているだけで、実際はあまりいらない。

●**富澤** でも、オリンピックを開催するという面では、いろいろな国から多くの方が来て人数もふくれあがるので、やはりそれなりの整備は必要ですけど、一から始めるってような方には、そこまでの整備は必要ありません。360度海岸線ですからね、日本は。後はセーリング



砂浜からスタートするレースもあるトライアスロン
©Satoshi TAKASAKI/JTU

だけではないと思うんですが、スポンサーが応援してくれるかどうかというのはとても大事ですね。

●朝日 スポンサーはほんとに大事です。

●宇田 スポンサーがついて、一人でも多くそれを仕事にできる人が増えることを目標にします。そのためには僕たちがまずはがんばらなければ。

スポーツは、する・見る・支える

●朝日 国内の試合や大会に出たときに、思い出のある場所はありますか。

●宇田 僕はやっぱり地元の琵琶湖。「びわ湖トライアスロンin近江八幡」があるんですけども、すごく好きですね。琵琶湖は、北の方に行くと本当にきれいですね。水が飲めるぐらい。

●富澤 印象に残っているのは、3、4年前でしょうか。宮城国体、震災の後行ったのですが、やはりその震災の津波の防潮堤などいろいろできていて、そのような中でも地元の人海の国体、すごく盛り上げてくださったので、とても印象に残っています。

●朝日 その地域の人熱量みたいなものがすごく印象に残っているということですね。よく、スポーツというのは、「する・見る・支える」と言われています。やはり、競技者もきちっとした環境よりも、実はみんなの熱気とか応援する人の空気感が、印象に残るということですね。

●宇田 それは大事ですね。

●朝日 そういうことがアスリートに影響するということですね。情報誌「港湾」は土木関係の読者が多くいらっしゃるので、きちっときれいに整備することがアスリートにとってプラスだと思われるかもしれません。もちろん安全面などすごく大事ですが、それ以上に応援するパワーが実は大事ですね。

●岩崎 私は、ロンドンオリンピックがすごく印象に残っています。ロンドンの人はクールなイメージが強かったですが、全くそんなことはなく、ボランティアの方が街にいっぱいいて、何か力になれないかな、という空気がすごく感じられましたね。

●宇田 大成功だったと言われてますね。

●朝日 ロンドンオリンピックは、7万人ボランティアを募集したと伺いました。それがきっかけで、ロンドン市民の半分くらいがボランティアをやってみようかな、と思われたそうです。実際、ボランティアに慣れている人ではなくとも、おもてなしができていた。さらに、ロンドン大会が終わった後の1年以内に、みんなまた違うボランティアに行ったそうです。スポーツボランティアをやって楽しかったのでしょうか。はまった、という感じなのでしょう。

実際に外から来た人は、「ロンドンは、皆さんとても親



©Satoshi TAKASAKI/JTU



パラトライアスロン
PTS4世界ランク4位

宇田秀生 Hideki Uda



©Satoshi TAKASAKI/JTU

1987年滋賀県甲賀市生まれ。小学校からサッカーを始め、高校卒業まで県代表として活躍する。2013年仕事上の事故により利き腕である右腕を切断、リハビリの延長でトライアスロンを始める。2015年第1回びわ湖トライアスロン in 近江八幡大会でレースデビュー、同年ASTCアジアパラトライアスロン選手権で2レース目にして優勝を果たす。2017年アジア選手権優勝、世界選手権4位。2018年ワールドカップ（イタリア）3位。NTT東日本・NTT西日本所属。

切だった。」と言ってます。これは東京がすごく参考にするべきこと。最近パラリンピックも当たり前のよう認知されるようになって、ロンドンだとパラリンピックもすごく評価され応援してもらった。2020パラリンピック大会がどれぐらい盛り上がるか未知数じゃないですか。会場を満員に、といった動きもありますが、そういったことが実現され、その後レガシーになるといいなと思います。

オリパラを通じてバリアフリーが自然に感じられて、 浸透していく社会に期待

●朝日 実際今、障害者に対する街のバリアフリー的なことについて何か感じますか？

●宇田 国内ではそこまでバリアフリーが進んでいないかもしれません。さっきの岩崎さんの話じゃないですけども、海外のいろいろなところに行かせていただいて、やっぱり海外の人の方が温かいというのを感じますね。

●朝日 そうおっしゃる方は多いですね。

●宇田 障害者は見た目にわかるじゃないですか。日本人だと、冷たい目線じゃないけれど、何となくちょっと冷めた目線がある。僕が事故をしてすぐの時は、それがつらくて。今は大丈夫ですけど、海外に行くようになって海外の人の温かい目線をすごく感じたというか。助けてあげようというか、そういう精神みたいなものがありますよね。

●富澤 僕もロンドンによく行くのですが、ロンドンのヨットハーバーだと義足の方や腕がない方などもごく自然にスポーツを楽しんでいる。

●岩崎 それが普通の光景ですね。

●富澤 日本だと、スポーツの場に健常者と障害者が一緒になる機会があまりないので、機会が増えてくると、もっとつながってくるんじゃないか、というのは感じますね。

●宇田 普通になればいいんですよね、特別じゃなくて。

●朝日 そう考えるとトライアスロンは、一緒にできますからね。これは大きな価値だと思います。そのあたりは、すごく考えなくてはならないと思いますし、今日の意見をしっかりと届けるという意味ではすごく納得しました。

●岩崎 オリンピックとパラリンピックが一緒になって、そういった部分を浸透させていかないといけないですね。

●朝日 アスリートの皆さんがおっしゃると説得力がありますね。我々も、ハード面のバリアフリーと心のバリアフリーといって、いかに自然体でみんなに受け入れられる社会になるか、頭で考えるものではないです、空気感ですね。でも、そう考えていくとオリパラで自然に感じて、浸透していくことには期待してしまいますね。決して教わるものではない。

海外から来る人達の過ごし方、楽しみ方に触れること

●朝日 情報誌「港湾」の読者の方々に、「この海、このハーバーはいい」といったお勧めのところはどこにありますか。

●富澤 ロンドンに関しては全部バリアフリーですよ。車いすでも全部行ける。ぱっと見てもハーバーに関してはそうになっているのが一目でわかる。

●宇田 ゴールドコーストはすごくいい感じでしたね。公園もいっぱいあって、筋トレするような器具も、水辺に並んでたりする。

●朝日 海辺に足が向くように設計されていますよね。ライフガードも公務員として、警察官、消防士と同じ並びなんです。ああいう文化はいいですね。雰囲気もいい。

●富澤 リオデジャネイロもすごく良い雰囲気でした。ビーチがあって、筋トレするような場所もあったり、すぐ近くに街がある。日本に帰って来ると、日本を代表するビーチでも、少しがっかりするところもありますね。



ゴールドコースト（オーストラリア） ©Satoshi TAKASAKI/JTU



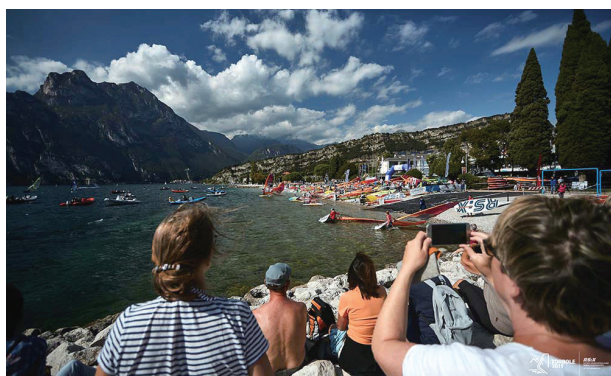
リオデジャネイロ（ブラジル）

●朝日 ハード面の整備の話もありますけど、利用者が変わってくると空気も変わるんでしょうね。オリパラで外国の方がたくさん来てくれるので、彼らの過ごし方、楽しみ方に触れるだけでも日本人がはっとするかもしれないですね。あんなふうに、自由に自然体に過ごしていいんだと。

●宇田 おしゃれですね。水辺のスポーツもそういったところから入ればいいかもしれないですね。

●岩崎 オリンピック・パラリンピックがまたいいきっかけになりそうですね。海外から来る皆さんが海外の雰囲気や文化を持ち込み、日本に良い変化があればいいなと思います。

●朝日 我々はおもてなしということで、いかに皆さんをきちっと受け入れられるのかというのも、もちろん大事な視点ではありますが、海外の人たちから我々が教えてもらおうという視点を入れないといけませんね。



セーリング世界選手権を楽しむ人々（イタリア）

オリパラを通じてたくさんの人が混ざり合い 雰囲気味わうことで変わっていく社会に期待

●朝日 最後に、皆さんに抱負を聞かせていただきたいと思っています。

●岩崎 選手が真剣勝負しているからこそ、見ている人たちが様々なことを感じ取り、感動するのだと思います。先日のラグビー W杯のように、多くの方にスポーツに触れていただき、興味を持っていただければと思います。また、会場の近くに行くだけで特別な盛り上がりを感じることができるのがオリンピック・パラリンピックだと思いますので、中に入らなくとも、是非会場近くまで足を運んで欲しいですね。

●富澤 オリンピックの目標として、僕は長い期間競技をやってきているので、メダルを取りたい、入賞したいというのを一番の目標としてきました。東京オリンピックではなんとしてでもそれを成し遂げたいというのが個人的な目標です。その結果によって、自分のやっている競技がいろんな人に知れ渡ってほしいというのも、また、2つ目の目標です。

●朝日 大きなチャンスですね。富澤さん、セーリング日本代表内定、と新聞に出て、たくさんの人が目にして、今度は結果でより多くの人に知ってもらいたいですね。

●宇田 僕の目標としては、表彰台に上がることを目指したい。ここ3年、世界選手権ですっと4番で、もうちょっとのところで表彰台に上がれていなくて。やっぱり全然違いますよね、3番と4番とでは。競技の目標はそれです。あとは、パラスポーツで生活できる人が一人でも増えるといいな、と思います。その意味で、東京2020は絶好の大チャンスだと思います。競技だけではなく、そこからまた違う仕事というか、別の何かにつながっていく選手が出ればいいなと思います。

●朝日 おっしゃるとおりですね。オリパラによって、障害のあるなしに関係なく共に仕事ができる社会になれば、ロンドンではないですけども、全部一緒に生きられるのいいかなと思います。

皆さんありがとうございました。皆さんの視点で、皆さんにしか話せない話が聞けてとてもおもしろかったですし、海辺ということでちょっと「潮の香りがする」ところも入れていただいて、読んでいただく方は楽しめるのではと思います。

皆さんは、常に日本と日本の外を経験されているわけですが、オリパラの大事なところは、海外の方や今まで日本に無縁だった方と「オリパラ」を通じて混ざり合う。それを感じ、今後日本がどうなっていくのか、ということが大切なのかと。

その中でトップアスリートたちが必死になって切磋琢磨するという、オリパラは非常に珍しい社会装置だと思っています。

とにかく、オリンピック・パラリンピックに向けて、しっかり準備していただき、がんばっていただきたい。そのお二人のがんばりを岩崎さんが解説するのが楽しみです。

本日はありがとうございました。



座談会写真撮影：長田洋平/アフロ